

広大な面積を持つ中国では、これまで都市部と農村部、あるいは東部と西部の距離があまりに遠く、互いのコミュニケーションが十分ではない面がありました。

このため、国内に無数の方言を生んだともいわれています。「北京語」と「上海語」、「広東語」がまったく異なるように、地方によって話されている言葉は千差万別。一つ山を越えただけで、方言が変わってしまうケースもよくあります。

携帯電話の普及は今後、中国の国内のコミュニケーションをより円滑にしてくれるはずです。地域間の情報の格差も減るのではないのでしょうか。そうすれば、内陸部などの経済発展が促されるかも知れません。何気なく使っている携帯を眺めていると、そんな明るい将来が想像されてくるのです。

中国のカンフー・武俠映画

現代中国学部
藤森 猛

剣や刀の立ち回りアクションを主とする「チャンバラ映画」は、中国語で「武俠片」といわれ、少林寺などの素手による拳法を主とする「カンフー映画」は「功夫片」といわれる。これらの映画ジャンルは、1970年代の“李小龍”（リ・シアオロン；ブルース・リー）、“成龍”（チャン・ロン；ジャッキー・チェン）の出現により香港映画の代名詞となってきた。80年代以降、中国大陸でも“武術片”、“武打片”、“動作片”などと呼ばれるカンフー・武俠映画が数多く制作されるようになり、2002年、

張芸謀（ジャン・イーモウ）監督による『HERO』が生まれた。

『女俠李飛飛』

香港の武俠映画は、いわゆる「任俠映画」に芸術アクションの要素を加えたものであり、1925年の『女俠李飛飛』がそのルーツであるといわれている。邵醉翁ら4兄弟からなる“邵氏兄弟”（ショウ・ブラザーズ）が経営する天一影業公司によって制作が行われた。また49年に『黄飛鴻伝』が制作され、以後50年代には、映画とテレビにおいて『黄飛鴻』ものがヒットし、わが国の『水戸黄門』・銭形平次』などに匹敵する長寿番組・シリーズ映画となった。

またショウ・ブラザーズからは、胡金銓（フー・ジンチュエン；キン・フー）監督が64年『大地児童女』、66年『大酔俠』をはじめとする武俠映画の話題作を次々と送り出し、60年代から80年代にかけての香港武俠映画のブームを支えた。

一方中国大陸では、“第一代導演”（第一世代監督）である張石川（ジャン・シーチュアン）監督によって、1928年『火焼紅蓮寺』が撮られ、いわゆる「武俠小説」を原作として武俠映画を制作する作品の模範となった。しかし49年の新中国成立後は、武俠映画の制作の中心は香港へと移り、1982年の香港映画『少林寺』の公開まで、中国大陸の映画観衆が武俠映画を見る機会はなかったといえる。

『龍争虎門』

香港のカンフー映画の台頭は、1971年の『唐山大兄』（ドラゴン危機一発）のヒットに始まる。アメリカ生まれの李小龍が香港の“嘉禾”（ゴールデン・ハーベスト）に移り、以後の香港カンフー映画ブームに火をつけた。わが国においては、73年の李小龍の急逝前後に公開された72年『精武門』（ドラゴン怒りの鉄拳）、73年『龍争虎門』（燃えよドラゴン）などの作品で、空前のカンフー映画ブームが起こった。

78年『酔拳』（ドラunk・モンキーノ酔拳）が

ヒットし、香港生まれの成龍がカンフー映画の新しいスターとなる。“喜劇片”(コメディ映画)の要素を多用した娯楽作品は、わが国においても80年代からブームを呼び、95年『紅番区』(レッド・ブルックス)などにより、アメリカにおける本格的な進出に成功した。2000年『龍旋風』(シャンハイ・ヌーン)のヒットは記憶に新しい。

また80~90年代にかけ、“香港新浪潮電影”(香港ニューウェーブ)の中心的な存在となった徐克(シュー・カー; ツイ・ハーク)監督や吳宇森(ウー・ユイーセン; ジョン・ウー)監督が台頭し、犯罪・アクション・刑事ものの映画の中でカンフー映画の手法が多用された。



映画『龍旋風』の看板(2000、上海)

『英雄』

中国大陆における本格的なカンフー・武俠映画制作の再開は90年『双旗鎮刀客』(そうきちんとうきやく)であり、“西部片”(西部劇)、“面条西部片”(マカロニウエスタン)や黒澤明の影響を受けた映画作りが話題を呼んだ。制作は“第五代導演”(第五世代監督)に属する何平(ハー・ピン)監督によっておこなわれた。

94年には、香港で最も売れっ子となった王家衛(ワン・ジアウェイ; ウォン・カーウアイ)監督によって、『東邪西毒』(楽園の瑕)が制作された。2002年4月1日に自らの命を絶った香港のトップスター張国榮(ジャン・グオロン; レスリー・チャン)と梁家輝(リャン・ジアフイ; レオン・カーファイ)が侠客を演じた。

2002年12月に中国において公開が開始された

『英雄』(HERO)は、2003年のアカデミー外国作品賞にノミネートされ、わが国においても2003年の夏からロードショー公開が続いている。第五世代である張芸謀監督の初のカンフー・武俠映画の娯楽大作であり、香港の人気スターの李連傑(リ・リエンジエ; ジェット・リー)、梁朝偉(リャン・チャオウェイ; トニー・レオン)、張曼玉(ジャン・マンユイ; マギー・チャン)、中国大陆の章子怡(ジャン・ズイー)が剣客として登場した。また陳道明(チェン・ダオミン)の始皇帝役も見逃せない。『HERO』は中国の“歴史片”(歴史ものの映画)、“愛情片”(恋愛映画)に香港の“武俠片”(武俠映画)“功夫片”(カンフー映画)の要素をとり入れた娯楽大作であるといえる。

これらの作品はビデオ・VCD・DVDで市販されているので、是非観賞をすすめたい。なお中国映画をもっと知りたい人は、愛知大学現代中国学部編『ハンドブック 現代中国』あるむ・2003年、愛知大学現代中国学会編『中国21 Vol.11 現代中国映画研究』風媒社・2001年の2冊を参照してください。

イギリスにおける語学教育の動向 「21世紀国家戦略」

法学部
平尾 節子

イギリスの首相 Tony Blair は国の政策の第1優先事項として「教育」、第2第3の重要事項も「教育」、「教育」を挙げている。1999年 Oxford 大学 Sheldonian Theatre の年次講演において「21世紀の教育と人的資本」というタイトルで、